

# 佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## 松香園の風に乗って

時田 陽三郎

平成二十九年四月一日。社会福祉法人佑啓会の杜のホールで約四百人の職員が集合して辞令交付式が始まり、私の名前が呼ばれ「市川市松香園の施設長を命ずる」と辞令を里見理事長から頂きました。松香園は佑啓会が市川市から指定管理者として運営を受託している生活介護事業所です。受託後、五年目を迎え、歴代施設長をはじめとする大勢の職員で作上げ、すべての面で試行錯誤を重ね、沢山の汗をかき作り上げてきた場所です。このような事業所の施設長になることになった私は、経験がなく、少々不安を隠せないままの着任でした。

申し訳ない気持ちと利用してくださる皆様に心配をかけないよう頑張るしかないと考えて第二の人生のスタートをきりました。



私は平成二十九年三月三十一日までは行政機関の職員として約三十六年間勤めて参りました。そんな私が第二の人生の職場として、社会福祉法人佑啓会でお世話になることに決めた理由について少し触れておきたいと思います。

佑啓会の基本的な考えの中に、「地域支援」という言葉が使われますが、私はこの言葉に心が動き、新しい感覚を感じ、勤める決心をしました。

今までの仕事は行政の窓口で障がいの方や保護者の皆様から色々な相談を伺い、安定した生活が送れるように支援することでした。幼児期のことばの指導から就学後及び卒業後の在宅及び施設入所支援が中心でした。特に、当事者自らがサービスを選択する現在と違い選択肢も少なく行政がサービスを決定する制度が主でした。現在のように複数のサービスを提示できませんし、当然希望や特性に合わせるサービスを提供することはできません。「地域支援」とは何をする事なのか、常に疑問を持

っていました。

事例をいくつか挙げて説明しますと、その一は二十数年前の話ですが、レスパイトという発想がなかったころです。

例えば冠婚葬祭時に預かって欲しいというだけの短期入所を利用している時代です。保護者の皆様は在宅でどんな状況でも家族が疲弊していても養育するのが当たり前だったころです。何らかの対応をしなければ家庭崩壊寸前で、理事長に相談すると支援方法を一緒に考えていただきその結果、多くのケースにおいて、施設のお世話になることになりました。

その二は当事者の方は安定した職がなく家庭は放任状態で、電車に乗って全国各地へ放浪の旅を続け、無銭飲食など軽犯罪を繰り返しては何度も刑務所で暮らした(現在は法務省の事業に再犯軽減を狙いに刑務所には社会福祉士などの地域とつなぐ役割の相談員を配置し、都道府県には地域生活定着支援センターを設置して、地域で生活しやすい支援制度があります。その後五十歳を過ぎて地元で暮らしたいと訴え、地方の刑務所から連絡が入り協議の結果、地元の刑務所で地域関係者による支援会議を開催して生活が送れるまでになりました。この時も制度ができる前の話です。



その後、同様な相談は次から次へとありまして、車を盗み運転して事故を起こした事件など様々な相談の対応を佑啓会にお願いすることになりました。

その三は高校生が家出をして保護された時に市での対応を要請されました。市だけでは支援がで

きないので、児童相談所と協議したところ市で支援するように強く要請してきますが、最終的には泊まる先がなく途方に暮れていた時、佑啓会に相談したところ即断の対応をして頂き、無事に対処できました。当時の担当者(現在は法人内の施設長)の話では、理事長から「社会福祉法人の役割だから受け入れてあげなさい。」と指示があったと聞いています。その時の当事者は成人するまで支援を継続して就労に向けて頑張りました。今も自立に向けて努力しています。

その四は精神的に不穏な症状を訴えては在宅で問題行動を繰り返しているため、高齢の両親は家庭では養育ができないという相談です。病院に相談すると治療することがないので両親が望む継続入院ができず、短期入所を利用しながら在宅支援するのが有効であると判断して、佑啓会に相談すると受け入れていただきました。しかしながら、不穏の訴えがあまりにも多く、支援者が疲弊し辞職してしまうこともあったようです。それでも時間をかけて傾聴することが大切だと再認識しました。



私が考えていた地域支援とは、ある制度を有効に組み合わせる支援することでしたが、あまりにも支援内容も幅が広く、様々な状況が発生するため非常に難しいことが多々あります。当たり前ですが、簡単ではありません。「いつでもどこでも、誰かが、できるだけの

ことをする」という気持ちを持つて支援にあたりました。一方、佑啓会は早くから地域支援の趣旨の下、多方面にわたり実践していたのでした。社会福祉法人の役割とは何か、行政の役割は何か、地域の役割は何かなど、とにかく実践しながら常に検討する社会福祉法人の姿勢に共感したのです。

私がどれくらいお役に立てるのかわかりません。今までのことも踏まえ地域へ恩返しできれば幸いですし、皆さんと一緒に考えて実践してみたいと思います。

特に、佑啓会のスローガン「明るく、元気に、さわやかに。そして品良く。」私には最後の品良くは時間が必要ですが、笑顔を忘れずに日々努力して参ります。

結びに、四月からの五ヶ月間に法人内には数多くの行事が開催されました。利用者さんの行事も一生懸命、さらに職員の行事も一生懸命、特に納涼祭、バレーボール大会、野球大会すべて全力で臨む姿勢にはエネルギーが満ち溢れています。その活力源は何か。それを今後見つけていきたいと思っています。

四月三日(月)初めて市川の地に足を踏み入れて早五ヶ月が過ぎようとしています。「明日は松香園」と繰り返して話をしている利用者さんがいますが、私も同様な気持ちです。地域の現状把握や市川市との協議も十分進んでいません。更には、施設の修繕も考えなければならぬことが沢山あります。

理事長が常日頃から言われる利用者さんを真ん中にして、利用者さんが快適に生活できる環境づく

くりと保護者の皆様に寄り添う姿勢を忘れずに、今後も地域支援の在り方を常に考え皆様のご協力をいただきながら安心してご利用いただける施設運営に努めて参ります。

松香園の風に乗って、職員が一つになって前向きに進んで参りますので、今後ともご指導の程よろしく願ひ致します。

(ふる里学舎松香園 施設長)

### ふる里学舎和田浦に 千葉県知事から感謝状

八月二十九日千葉市内のホテルで平成二十九年年度道路功労者表彰が行われ、ふる里学舎和田浦に知事感謝状が授与されました。旧和田町から行われている「ふるさと美化運動」に開設当初から加えていただき、利用者、家族、職員が地域の皆さんと一緒に、道路清掃を行ってきたことが受賞の理由でした。今後も「体験と感動が可能性を生む」という理念のもと、やれる事をコツコツとやって行きたいと思っていますので、地元の方皆さんよろしく願ひ申し上げます。



写真は、表彰式後、石井裕南房総市長にご報告に伺った時のものです。

## 息子のこれから

## 伴 暖子

今年の息子の誕生日に姉嬢が『豆源』の「おとぼけ豆」を持ってきてくれました。おとぼけちゃん、というのが我が家での息子のあだ名。

2年前、彼のてんかん発作を治療して下さっている小児神経科の待合室のこと。声の限りに叫ぶ男のお子さんを必死で抑えようとしているお母様が「お兄さんは静かでないですよ...」と私。その時、傍の中学生くらいの女の子が「おとぼけちゃん」と言ったのです。お母様が「この子の大好きな白雪姫の小人さんの中に言葉をしやべれない人がいて、彼は『おとぼけ』と呼ばれているのです。」男の子のお母様もその話に耳を止めて、一瞬皆がメルヘンの世界に居るような優しい空気に包まれたのです。そんな風のように穏やかな空気に包まれてこれからも生きていければと思っております。

それは突然の嵐のような事態でした。私が膝の半月板を損傷して、息子の日常全てを引き受けることができなくなったのです。その「混乱の記」です。

息子は生後8か月で化膿性髄膜炎を患い、九死に一生を得てから、今年で46歳を迎えました。髄膜炎の痕跡は大きく、残された脳の代替作用で生かされています。知的障害、片麻痺、と誰が見ても最重度、出会う方は、どなたも身構えられるに達しない程です。そんな息子との生活、小さな家に、不意の転倒などへ出来る限りの対応策を取りながら、通所の時間以外はほとんど二人で過ごしてきました。時には臆病に、時には積

極的に母と二人のコビとして、可能な範囲の生活でした。苦勞とは思わなかったのです。

かわい子には旅をさせろと言いますが、どんな時、どんな方とも自然に出会えるような子に育てたいと思っていました。でも、息子の身体状況が一筋縄ではいかないことを考えると、母の手から遠くに旅をさせることが出来ませんでした。緊急事態に備える心の準備も全くありませんでした。それでも、助けを求めなくてはと、回らぬ頭で考えたのはやはり一番身近な通所先の松香園。そして日頃移動支援でお世話になっていたNPOグループ、虫が知らせたようなタイミングで今年から相談支援を受ける約束をして頂いた相談支援専門員さんでした。皆様の連携で、私の治療も含めて、いつもの松香園通所の生活を続けるためのあらゆる支援が講じられ、現に3か月、その体制の中で守られているのですからこんな幸福なことはいと、自分の不甲斐なささへ恥じる気持ちがあれば、感謝の気持ちに浸かっていれば良いのですが。



今こうなったからには、心を強く持つてあらゆる挑戦をさせて、新しい場所に応える息子にしていかなければならないでしょう。でも、痛い足をかばう為に、キヤスター付きの椅子に座って洋服の着替えを手伝い、排便の始末する私を息子はじっと覗き込んで、何か言いたげです。もの言わぬ彼の心が何なのか、私も物言わず想像します。自分の怪我也早く治癒を願いますが、この息子も支えなければと、どちらを優先することもできません。

重い障害を持った息子と生活をするには、理想と現実とは折り合いをつけながら無理はしないできたつもりでした。でも自分が役に立たない状態

になるという超現実の前に理性的な気持ちは萎えてしまいました。これまで通りの環境で生きていくと

き、どれほどの福祉関係の方々方が力を貸して下さいませんか、親しい仲間が何かにつけて駆けつけて下さっているか、姉嬢が仕事を縫って入浴や散歩に連れ出してしてくれているか、など考えます。今の解決が正解ではきつとないとは思いつ、母も息子も必死で、お互い自由にならない身体を何とか動かして、立ち上がり...。親子とも必死の毎日が過ぎているのです。

家庭と通所先というリズムのある日々を長く基本にしていたせいか、松香園が大切で、連絡帳も正直に？何でも書き、活動のひとつひとつにも真摯に対応してきたつもりです。ですから馴染みの職員さんとの松香園が息子にとつて一番安心な場所なのではないかと単純に思い込みたい、そんな気持ちになつていきます。

息子のこれからを考えるとき、いかに広い解き放たれた気持ちで未来を捜さなければならぬかを、75歳の今日、突き付けられてしまいました。疑いようもなく多勢の方の思いやりに包まれている幸せをかみしめながら、今後のよき人生を捜したいと思えます。

(ふる里学舎松香園 保護者)

## 温かい夏

茂木 健太郎

今年、例年とは少し違った夏だ。6月、7月は殆ど雨が降らず、テレビのニュースでは口をそろえて「ダムの貯水率が...」と、言っていたかと思えば、8月に入ると連日の雨、東京の8月の日照時間過去最低を更新に。降らな過ぎても降り過ぎてても不満を言われて

しまふ雨に少し同情しつつ、何事もちようど良いが一番だなと一人納得してゐる。

しかし、1年の中でこの日だけはテルテル坊主を何個ぶら下げてでも晴れにしてみらなければ困る。そう、ふる里学舎の夏を象徴する大イベントの『納涼祭』である。日頃からお世話になっている地域の皆様や利用者さんとそのご家族にお祭りを楽しんでもらうという行事であり、近年では来場者は2500名を超えるまでに一大イベントである。私は就職して今年で9年目だが、万年駐車場係だ。

メイン会場の賑やかさは遠くの歓声や拍手でしか伝わった事がない。しかし、6月の初頭の実行委員会、で、納涼祭担当幹部の飯田次長から「今年の納涼祭は、茂木を実行委員長にして進める」という驚愕の一言から、私にとつての納涼祭が例年とは違うものとなった。

「駐車場係しかやった事ないから無理ですよ」と一応断つては見たが、「だいじょうブイ」と変な親父ギャグで力ワされてしまった。「ホント、自分で良いのですか。じややりますよ」と思いとは裏腹な言葉で了承してしまった。ここは男を見せるしかない。



まさに右も左もわからないという状態とはこのことか。いろんな人から「茂木、あれはやったか？大丈夫か？」と毎日のように言われるが、「あれじゃ、わからない。見かねた林主任が「大丈夫。それは終わっている」と自分に代わって答えてくれた。それにしてもあれでわかってしまふ林主任はすごい。

そんな話はどうでも良い。私のメインの仕事は準備から後片付けに関わる職員やボランティアさんの動きをつくる事と実行委員をまとめる事だ。ふる里学舎の職員は、法人全体で500名を超える大所帯。納涼祭はあらゆる事業所から応援を頂いている。勤務表を見ながら各事業所に電話をかけ、応援職員をお願いする。実行委員会も何回も行い打ち合わせを重ね、事前準備で多くの方に協力頂き、何とか当日を迎えることが出来た。

私はイベントになるとなぜか高い確率で雨が降るので心配していたが、当日は案の定朝から雨である。ちなみに前日準備も雨だった。天気予報リーダーでは、午後には雨が上がる見込みだった。しかし、午後もポツリポツリの状態であとは運を天に任せるしかない。

当日は、各セクションの主任、係長が中心となり、あとは任せておけと言わんばかりに、模擬店やゲームの準備を段取り良く、各事業所からの職員だけではなく、家族会の方にもお手伝いして頂いた。開催時刻になると地域の方や利用の方が多数来場して頂き大盛況。オープニングでは遠方から来て頂いた4名の方によるサックスフォーンの四重奏が鳴り響き、千葉明德高校チアリーディングによるパワフルな演技が続く。メインは歌手の日野美歌さんによるオンステージ。父親が鼻歌交じりに歌っている水雨の人だ。その後は地元大塚囃子のお囃子、そして最後の餅投げで無事に大団円を迎えることができた。私が納涼祭の会場内を歩いていて一番嬉しかったことは、地域の方や利用者の方が本当に楽しそうに過ごしていたことと、皆さんとても良い表情で挨拶をしてくれたことだ。

最後の一人までお見送りし、後はお待ちかねの打ち上げである。里見理事長からも「茂木良くやった。良かったぞー」とお褒めの言葉を頂いたが、感謝しなければいけないのは自分である。

今回、納涼祭実行委員長と大役を任された事により、僅かではあるが今までは違う立場での仕事の仕方が学べた。私はリーダーシップを発揮し、みんなを引っ張っていくというタイプの実行委員長ではなかったが、人の温かさに支えられながら、なんとか納涼祭を大成功に導くことができた。

上司や同僚達が、茂木が大変だろうと見えないうところであろうとお膳立てをしてくれ、恥を欠かせないようにと随分と動いてくれた事が後で分かった。本当に有難くこの法人の良さを改めて感じる事が出来た。

9月に入って「茂木！実行委員会の打ち上げ早く設定しろ！俺らの納涼祭は終わってねえぞ！」とだいじょうブイの飯田次長からの押しが毎日のように入る。どういう事？林主任助けて！

(ふる里学舎静風荘 支援員)

## 編集後記

夏が終わりに行楽シーズン到来。一泊旅行やスポーツ大会など盛りだくさんです。行事の様子など随時啓会会のSNSに載せていきますので、ぜひご覧下さい。

河田理紗子

facebook



twitter

